東方化学録

蜘蛛の血

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

東方化学録

【Ｎコード】

Ｎ３２２２Ｒ

【作者名】

蜘蛛の血

【あらすじ】

西暦２２００年、第一次魔素対戦ｅｔｃ．により魔術と科学が交差する時代。

その時代に科学のみを頼りに魔術をせん滅しようと活動する第七機関。

その第七機関の科学者やサイボーグたちが、幻想郷と呼ばれる科学の発展が遅れている世界に落とされる。

prologue（前書き）

何となく面白そうだから作りました。
更新はものすごく遅いですが、もしよければ読んでください。
どうぞ

prologue

此処は、第七機関と呼ばれる組織が活動している施設の一室。
「ココノエ、いったい私の体で何をしている。」
「ん？　あぁ、これはいざという時のための飛行バーニアだ。
私はお前に足りないものは機動力だと思っている。」
「それには同意するが、私は今まで機動力で苦労したことはさほどない。
苦労しても私には磁力の力がある。」
「それは確かだが、あって損はしないだろう。」
「……」
彼らはこの一室の住人と言えばいいだろうか。
ピンクの髪に猫耳の科学者風の女性。
赤い皮膚に金属製のアームなどを身につけている。サイボーグのような大男。
そして、白に近い金髪の無感情な少女。
「ところでココノエよ。」
「ん？　なんだテイガー。」
「第十一素体のテストの件だが。」
「あぁ、Λ（ラムダ）か。
あいつなら心配ない。調整もある程度済んでいる。もう実践に送っても問題ない。」
「そうか。」
そんな感じに適当な会話をしていると。
「空間の乱れを観測。」
「何だと？　またレイチェルか！？」
「いや、この波長は別のものだ。今まで観測したことがない。」
「そのくらいはわかっている。だがあいつの波長はよくわからん。」
そんなことを話していると……

「！」
三人の足元に空間の裂け目が現れ落ちる。
「な、なんだ！」
「よし、テイガー、今付けたバーニアで飛んでみろ。」
「了解した。」
大男の足から火が出るが……
「やはりあの低コストではだめか。」
「ココノエ……」
落ちる速度が下がっただけで落下を続ける。
「Λ、何とかしろ。」
「……」
「ココノエ、流石にそれは無理というものだ。」
「そうか……」
三人は、ことなく落ちて行った。

空間の裂け目から脱出したかと思うと、よくわからない山に出た。
「で、此処はどこだ。」
「私が知るわけないだろう。
Λ、座標は出せるか？」
「データなし。」
「何だと？　もう壊れたのか？」
「いや、流石にそれはないだろう。Λ、何か今までと変わったことはないか？」
「魔素の反応ゼロ、熱源多数。」
「何だと？　この時代、魔素が全くないなんてあり得ん。
とりあえず本部に連絡して場所を特定……って圏外か。」
「圏外だと？　妨害電波などの類ではなく電波が全くないだと。」
「あぁ、今の時代カカ族の村でさえ何とかつながるというのに。」
場所の違いに戸惑いが隠せてない様子。
だが、一人だけ冷静である。

「熱源接近中。危険度をBと認識。」
「どうせ図書館のやつらだろう。テイガー、Λ、適当に追い払え。」

prologue（後書き）

これからどうなるんでしょうね。
それでは

REBEL1（前書き）

さっそく戦闘です。
後、東方キャラが初登場です。
どうぞ

REBEL1

よくわからない山奥に飛ばされ、さらに敵に囲まれているというしょっぱなから大変な事態に陥ってしまった第七機関の方々。

「Λ、熱源の温度はどうだ？」
「熱源温度、２８℃。」
「低いどころの騒ぎじゃないな。魔獣かもしれん。テイガー、Λ、貴重なサンプルだ。殺すなよ。」
「了解した。」
「了解。」

Λとテイガーは背中合わせになり、周囲を見る。

「キエェェェイ！」
「アトミックコレダー！」
「システム始動。」

急に出てきた生き物は、緑色の皮膚に甲羅を背負い、鳥のような口を持っていた。

「何だこいつら。こんな姿をもった魔獣がいたか？」
「いや、データにはない。おそらく新種かなんかだろう。」
「これは研究のし甲斐がある。」
「ココノエよ。気持ちは分からなくはないが、今は非常事態だ。」
「ああ、解っている。」
「フィールド発生。」
「キキッ！」

ラムダは、敵のいる位置に重力の強いフィールドを創り、動きを止める。

「最初からこうしておくべきだったか。」
「だな。」

一応敵の動きを封じて一段落。
と、その時。

「あだっ！」
「！」

何かが上から落ちてきた。
その何かは、普通の人間の少女のように見える。

「な、何？　体が重い。」
「……人間か？」
「人間？　私が人間に見えるの？　そりゃないよ。
そりゃ嘴はなくて皿も隠して、甲羅じゃなくてリュックだけどさ。
私はれっきとした河童だよ。」
「河童？　魔獣とは違うのか？」
「魔獣？　何それ？　そりゃ幻想郷には妖怪はいっぱいいるけど。
魔獣なんて種族は聞いたことないよ？」
「妖怪？」

聞きなれない単語に困惑する二人。

「データ検索。該当なし。」
「あぁ、Λには最近のデータしか入れてないからな。
確か、妖怪ってのは、相当昔に存在していた、変な生き物で、また、

その昔に陰陽師とか何とかに退治されたとか何とか？」
「そうそう、退治されていないし今も生きてるけど、その妖怪だよ。で、妖怪の中でも私たちは河童っていう水場を好む種族なんだ。」
いろいろと話しているが、相手はまだ重力で大変なことになっている。

「ところで、こいつらはお前の仲間か？」
「ん？　そうだよ。なんか迷惑かけちゃったみたいだね。
はい、みんな持ち場に戻って。」
「クエ！」

少女の一言に河童たちは一斉にどこかに行った。

「さて、Λ、流石に放してやれ。」
「了解。」
「ふー、やっと軽くなったよ。
あぁ、自己紹介がまだだったね。私の名前は河城にとり。この山に住んでるただの河童だよ。」
「私はココノエ、第七機関の科学者だ。
こいつはΛ－１１－（ラムダイレヴン）第十一素体に第十二素体の精神を入れたいわゆる……なんて言えばいいか。」
「まぁ、一応理解してくれたと思うからいいだろう。
私はＴＲ－０００９アイアン＝テイガー。ココノエに作られたサイボーグとでもいえばいいか。」
「さ、サイボーグ！？　あのサイボーグ！？　機械人間でしょ？
どうやって作ったの？　教えて教えて。」

テイガーがサイボーグと知るや否や、眼を輝かせてココノエに近づいてきた。

（妖怪の時代に、科学というものはあったのか？）
「テイガー、そこには私も疑問を持つ。その前ににとりといったか、此処はどこだ？」
「え？　ここは幻想郷の妖怪の山だよ。
幻想郷は君たちのいた世界よりも狭いはずだから回るのにそんなん時間はかからないよ。」
「そうか、ではもう一つ質問だ。なんでお前はそこまで科学に興味を持つ？」
「だって、面白いじゃん。１００％の確率で同じことが起こる。精神状態も関係なく、絶対なものだよ。幻想郷ではそんなものは多くないからね。
私はそんな科学を研究しているんだ。」
「なるほど、では、私たちがその研究に手を貸してやる。」
「本当に？」
「おい、ココノエ。そうやすやすと信じていいのか？　いくらこいつが科学を研究しているといってもまだこの世界には不明な点が多い。」
「だからこそだ。こんなよくわからんところに飛ばされたらとりあえずミノを捜さないといけないだろ。」
「……」

って、ことでさっそく出会った河城にとりの研究室に行くことになった。

REBEL1（後書き）

うん、短いですね。
科学ってことでにとりを出しました。
次回はどうしましょうか。
それでは

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n3222r/

東方化学録

2011年7月27日22時36分発行